をよせて頼みかけるようにして、よいおこないの集団的な方向づけをしてはいかがでしょうか。

五歳児

T君は頭脳も行儀もよく何事にもできばえ上々、けれどもいつも人の機嫌をうかがっているような眼なざし、男の子らしい元気も迫力もない。善悪の判断が極めて早く損だと思うことには決して手出しはしない、共同的な作業などではいつの間にかふうっと姿をくらましてしまう、ときには僕そんなこと悪いことだってことお母さんに教わったもの、だから仲間にははいんないよ。などといってることもある。

お母さんの家庭教育ぶりをうかがってみると、実にしっかりとした道徳的なしつけ主義で禁止教育をやっているのです。

そこでこのお子さんの自由を尊重した解放教育が目下の急務であることについてお話し合いをしました。賢明なお母さんは喜んで、協調してくださいました。時々解放のがまんのつらさを訴えることもありますが、それでも明朗に　活潑に　思いきって誰とでも遊べるようになってきたことを喜んでおられます。

年長組ともなれば、大いに、社会生活の規律や集団の行動などに重きをおき、社会性のよりよき発達の素地に力をいたすべきでしょう。

（日出学園）

# おはなし・劇あそびをとおした幼児の生活指導

鈴木正子

昨年の二月頃だったでしょうか。もうじき一年生になろうとしている子どもたちでしたが、ちょっとしたことから面白いはずの雪合戦がけんかに発展してしまった時のことです。

原因を聞けばAのつくった雪だるまをBがこわしたというのです。BはAが先に意地悪したからこわしてやったのだと言ってゆずりません。二人のうえにそれぞれの加勢がくわわって大変なことです。お互いが許し合うなどとんでもないことらしく、みんなで仲良く遊びましょう」などと言っても聞きつける状態ではありません。そこで私はあそびを変えて、二、三の子どもを誘って室に入って紙芝居を始めることにいたしました。

私が室にはいってしまうと、けんかで興ざめた子どもたちもみんなついてはいってきました。これは子どもたちも私も大好きな紙芝居のひとつなのです。

あらましを書いてみましょう。

『ある山の中にごんべえという意地の悪いおじいさんが住んでいます。山の動物たちは、すぐ鉄砲をむけてかれらをおびやかすこのおじいさんを、おそれ憎んでいます。ある雪の日のこと、おじいさんが、なだれにやられて死にかけるのです。動物たちは、いい気味だとよろこびます。

けれど雪に埋れて眠ったようになっているいつもとちがうおじいさんのやさしそうな顔をみているうちにふと気の毒になってきます。そして雪の中からおじいさんを堀

り出して山をかついでおります。
動物たちによって助けられたおじいさんは、動物たちの温かい気持にうたれて鉄砲をすてて良いひとになります。三角山にはほんとうの春がやってきました。
（たのしい三角山・柿原啓吉作　松山文雄画）
はじめのうちは、子どもの中にひそんだ、ごんべいじいさん的とげとげが室一ぱいにみちて私をこまらせましたが、話が進むにつれて、ごんべえさんはだんだんにいなくなってきました。三角山に春が来る頃にはAちゃんもBちゃんも日頃のAちゃんBちゃんにもどっておりました。紙芝居が終ってまたけんかが始まるかどうかということが気がかりでしたが、子どもたちは忘れたように、どちらからともなく歩み寄り、また仲良くあそびはじめました。
ごめんねとは言い合いませんが、自然のうちに仲なおりが成立したようです。
子どもたちは時間がたったのでけんかを忘れてしまったのでしょうか。でもそれにしては激しいけんかでした。
子どもたちはお話のもっている教育的な意味を了解して、けんかはしない方が良いと気がついたのでしょうか。でもそれではおとなすぎます。いいえ、むしろお話のかもし出す、ふんいきが、けんかなんか忘れてしまうような気分に転換させたということがほんとうのところかもしれません。
私は子どもがかえってから、なぜこの紙芝居が、今日のこのけんかに良い結果をもたらしてくれたのかということをもう一度考えてみました。
第一に幼児たちの好きな動物が登場しますし、画も文の長さも幼児の心にぴったりしているということは言うまでもありません。
そういう条件のそろった上に、このお話には教訓的なことばはひとつも出てこないのですが、おじいさんを助けずにはいられない動物たちの気持、また良いひとにならずにはいられないおじいさんのきもち、自然にうまれた善意と善意のぶつかり合いが、何ともいえない温かいものを全体にみなぎらせているのです。
もちろんこのお話を聞いたからといって子どもたちの世界から、けんかが無くなろうなどとはおもいません。また明日には明日のいがみ合いが生じることでしょう。そうしながら幼児たちは成長してゆくのですから。ただこの例によって私が感じさせられたことは、良いお話のもつふんいきというものが、こんなにも幼児の心をやわらげてくれたということなのです。ここから考えていても、幼児たちはしばしば良いお話をあたえられることにより、知らぬ間に豊かな人間に成長していってくれるだろう、ということなのです。
またある日のことです。
楽しいゆうぎ会が終ったあと、あるおかあさんが、こんなような意味のことを申しました。
「あの劇はとても面白うございましたね。ああいう劇をすることによってだんだんに協力のこころや責任感を養われていくのですね」
「あの劇」のあらましを書いてみましょう。
『ある動物の街の中に四軒の家がありました。各々の家にはそれぞれに家族が住んでいるのですが、みんな自分のことばかり考えないやからばかりです。かりにABCD家

と致しましょう。ある秋の朝、落葉がたくさんちらかっているのをみつけ、Aは自分の家の前だけ掃いてBの家の前にその落葉を押しやっておきます。BはこれをみつけCの家にやります。CはDの家にそしてDはまたAの家の前にごみの山をつくります。Aはさきほど掃いたごみが家の前に舞いもどったのを発見して、みんなを呼んで聞いてみます。

みんなは、はじめて自分のところだけきれいにしていたことに気がつきます。

そしてこんどはみんなで力をあわせてお掃除をいたします。そして今度は、ほんとうにきれいになったとよろこびます。

（保育新書劇あそび　きれいになった　小池たみ子作）

この劇はくり返しの歌でつながれています。リズムにあわせてほうきを使うのがうれしくて、はじめ子どもたちはよろこんでやっておりましたが、だんだんくりかえすうちに、ほんとうのお掃除にも興味をもつようになり、みんなで一緒に片づけたりすることもだいぶ自発的にできるようになりました。

こういう所からおしてみても、たしかにほんのわずかではありますが、前述の母親のことばにもあったように、協力のこころや、責任を感じる心の芽生えといったものが生れてきたことはたしかです。

幼児たちは劇中の人物を演ることによって、具体的に、自然に、しかも自分自身で、それらのこころを感得してくれたわけです。

いま私はここに二つの具体的な例をあげてみましたが、

「お友達とは仲良くしましょうね」

「自分のことは自分でしましょうね」

と言うような概念的なことばよりも、実際に良いお話（童話、紙芝居、スライド、絵本）劇あそびなどをあたえることが、どんなに幼児の生活に良い影響をおよぼすかということを考えてみたかったのです。

こうした経験のつみかさなりが、大きくなって正しい生活のできる人間を育てる基礎となることを考えながら、私たちはつねに豊富な資料を用意して、幼児たちの心をつちかうことにつとめたいものだとおもいます。

（群馬大学付属幼稚園）

# いなかの子どもたちから感じとるもの

八坂富子

私の住んでいる三原市は人口八万程の瀬戸内に面した小さな都市である。

東京から急行で十七時間、大阪から五時間ばかりのところで文化の中心地からは程遠い感がする。終戦直後、世の中がはげしい変り方をしている時に始めて三原の土を踏んだ。戦争の傷手も受けていない古い家並が軒を連ねて、落ちついた感じのする城下町である。

旅から赴任した私にとっては、すべてが生々しい経験で、地方の都市の特色とか、安芸路の印象、それに家庭生活を通して感じとる人情のあれこれ、あるいは子どもの生活が円滑にいかない苦しみ、主としてこ